◆坂田寺の調査—1996-1次

1　はじめに

この調査は高市郡明日香村祝戸における民家新築工事申請に伴う事前調査である。

申請地は通称「マラ石」の南、国営飛鳥歴史公園祝戸地区に南接する細長い畑地で、1980年に発見された仏堂跡の西約60m、仏堂に取り付く回廊で囲まれた奈良時代の坂田寺の中枢伽藍の西半に位置し、その南端は西回廊の中央部分にあたる。したがって調査は西回廊の位置と規模の確認と、伽藍が西面していた場合の中門の確認を目的とし、あわせて、不明な点が多い7世紀代の坂田寺の遺構の確認をめざした。

なお、奈良時代の坂田寺は国土方眼方位に対して北で西に約15度偏した方位に造営されており、以下では繁雑を避けるために仏堂の正面を西として記述する。

2　層序と遺構

調査地の層序は上から耕作土、床土、灰褐色土、茶褐色砂土、暗褐色砂土であり、中世の遺構は茶褐色砂土上面で、奈良時代の遺構は暗褐色砂土の下面で検出される。茶褐色砂土・暗褐色砂土は奈良・平安時代の境内面をなす土層である。境内面の下には黄褐色粘土、暗灰色砂土、茶褐色粘土等が複雑に存在するが、すべてが奈良時代の伽藍造成に関わる土層と考えられた。検出した遺構には中世の自然流路、柱穴、平安時代の土坑、奈良時代の西回廊礎石、回廊内側雨落溝である南北石組溝、境内地の舗装石敷、造成過程の柱穴、素掘溝などがある。

伽藍の造成

調査区東壁際で、7世紀代の坂田寺の伽藍推定の手がかりを求めて断ち割った結果、調査区内には前代の伽藍

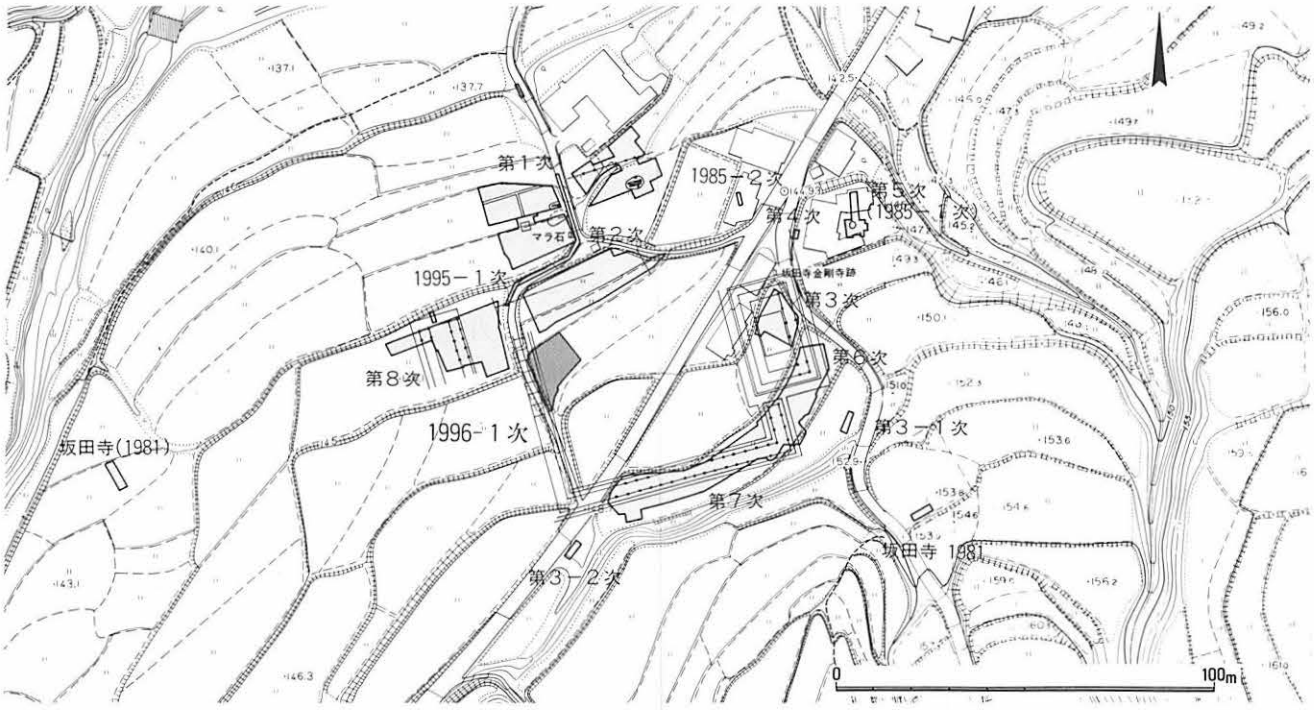

図65　坂田寺調査位置図　1：2000

関連遺構は発見されず、むしろ奈良時代の伽藍地は7世紀代の瓦や土器等を多量に含む粘質土等による大規模な造成によって作られていることが判明した。造成土は基本的にば北、西に厚く盛られている。造成土は北では検出面下2m、南では同じく1.6mにある暗灰色粘土までを確認したが、同層もその一部である。調査区西端では検出面下2mに至っても瓦を含む灰色砂層があり、西側は谷であったとみられる。奈良時代の造成以前の高地は伽藍の東寄り、仏堂を中心とする地域であろう。

造成は境内面下0.4mでほぼ上面を揃え、その上を黄褐色土を中心とする土で広く整地する。なお、最終段階の直前には北東部を中心にする半径5mほどの楕円形の範囲が浅い皿状になっており、そこに最大厚0.3mの炭化物や瓦を多量に含む粘質土を積んでいる。

調査区東南端の下層素掘溝は先述の炭化物層の後、造成の最終段階直前に掘られた溝で上端幅1.2m、深さ0.25mの断面V字形をなす。後述する平安時代の土坑の下で「く」字形に湾曲して南に延びる。埋土には丸・平瓦が多量に含まれ、流水の形跡はない。調査区東南隅の下層柱穴は一辺0.8m以上、深さ0.8mの規模で、境内面下0.6mの造成土中から掘られている。下層溝とともに造成過程の遺構であるが性格は明らかでない。

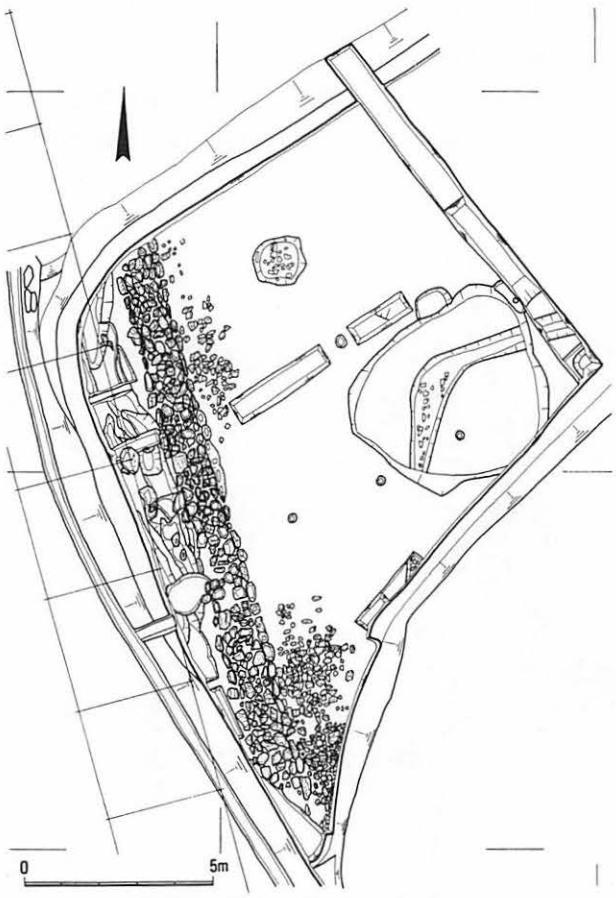

図66　坂田寺1996-1次調査遺構図　1：200

奈良時代の西回廊

調査区の西で検出した礎石は辺0.4×0.5m、高さ0.25mの不整方形を呈する花崗岩自然石で、礎石の上面は直近の雨落溝西側石上面よりも10cm高い。柱間は南・東回廊では桁行、梁間とも約3mであり、本礎石の北3mにある穴は礎石抜取穴であろう。礎石周囲の回廊基壇は中世の自然流路によって洗い流されているが、わずかに残った土から判断すると、回廊基壇は厚さ1m以上の砂層の上に積まれた伽藍造成土の上に、暗褐色土を厚さ0.5m積んで作られる。その上面から掘った穴に礎石を据え、雨落溝の石組を作る。検出した礎石は第7次調査成果に照らすと回廊西南隅内側柱から12間目にあたる。

南北石組溝は礎石の東約1.3mに西側石を据えた幅0.8m、深さ0.1mの溝で底には0.2～0.4m大の自然石を敷く。南北約16m分検出し、さらに南と北とに延びる。北接する第2次調査区は大きく一段下がっており、削平されたとみられる。溝底は検出区間内で約0.2m北へ低く、南回廊内側雨落溝底石の高さから推算した西南隅部との比高は約1.1mで、西回廊全体は30/1000の傾斜をもつことになる。ちなみに南回廊の傾斜は5/1000である。

雨落溝内側の境内地内には石敷・礫敷が施されている。0.2m大の玉石を敷いた石敷は雨落溝東側石から2mの範囲に残り、その内側は小石を乱雑に敷いた礫敷となっている。礫敷と石敷の境界は明確でなく、石敷上を覆う茶褐色土や礫敷中に瓦や奈良・平安時代の土器が入っていることからすると、礫敷は後世の補修であると思われるが、建立当初、回廊内全域が石敷であったのか雨落溝に近接した部分だけであったのかは明らかでない。

平安時代・中世の遺構

調査区東部の土坑は径5.5m、深さ0.4mで、埋土には平安時代後期の土器が含まれている。境内地内部の整備に伴う土坑と思われるが、坂田寺は仏堂・南回廊での所見ではともに10世紀後半代に倒壊しており、それとの先後関係については明らかでない。中世の柱穴は直径0.3mの円形柱穴が6個あるが、建物などにまとまらない。調査区西端の自然流路は、回廊雨落溝の石敷上から西側石

を壊し、回廊基壇土の大半を洗い流した急流で、底面には流れの渦でできた穴があり、島状に取り残された礎石の北には滝壺状の穴が生じている。堆積した灰色砂には13世紀前半の瓦器などが含まれている。

3　遺物

瓦、土器、金属製品、土製品、銭貨などがある。

瓦には多量の７世紀代のものと少量の平安時代のものがある。軒瓦には軒丸瓦18点、軒平瓦８点がある（表６）。軒平瓦に２種の新型式があり、第７次調査で公表した一覧に追加しておく。１種は六重弧紋の109型式の薄手品（図67上左）で、第７次調査で瓦当厚の判明する例が出土しているがそれは未公表であった。109型式Ａ種（藤原宮6561Ａ）が瓦当厚約5.4cmである（図67上右）のに対して、本例は4.4cmと薄手で○と×の型押しも小さい。瓦当幅や全長も短いかどうかは良好例の出土を待って決したい。他の１種（図67下）は平安時代の軒平瓦で、中心飾りが123型式Ａ種に似るが、唐草紋と外区、脇区紋様が異なる。外区に界線をめぐらすだけであるのは124型式Ａ種に似るが、唐草紋の形状の差が大きく、中心飾りが不明なので124型式Ａ種の右半と確定することもできない。凸面に縦削りを施し、凹面は瓦当上縁側を削る。なお、丸瓦は1,554点、154kgが、平瓦は12,453点、651kgが出土した。丸瓦には側板連結模骨痕をもつ行基丸瓦が多数含まれている。

土器には７世紀前半から平安時代の土師器、須恵器、黒色土器と中世の瓦器の他に、緑釉椀、三彩火舎、二彩壺、灰釉椀、白磁椀などがある。緑釉椀と二彩壺は調査区南端の境内地内石敷周辺および平安時代の土坑から出土した。土製品にはフイゴ羽口、炉壁、鋳型があるが、

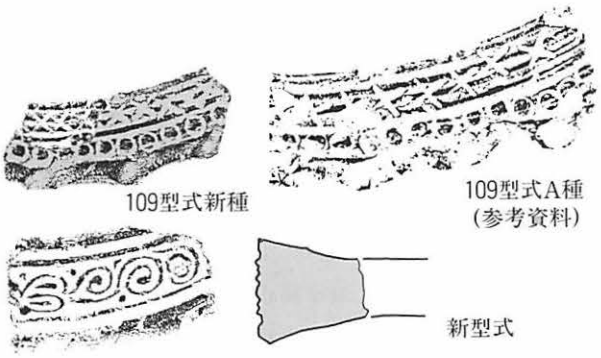

図67　坂田寺1996-1次調査出土軒平瓦　1：4

表６　坂田寺1996-１次調査軒瓦等点数表（　）内は種不明を含む

	型式	点数		型式	点数
軒丸瓦	６Ａ	2	軒平瓦	104Ａ？	1
	７Ａ	1		109新種	1
	11Ａ	1		121Ａ	1
	21Ａ	2 (6)		122Ａ	1
	23Ａ	1		123Ａ	3
	26Ｂ？	1		新型式	1
	28Ｂ？	1		合計	8
	32Ａ	1 (3)	その他	面戸瓦	1
	不明	2		円盤状瓦製品	1
	合計	18		塼	1

いずれも伽藍造成土中に含まれたものである。鋳型は長径6.2cm、厚さ5.2cmの破片で一端に端面が残り、弧を描く型面も遺存するが製品は判然としない。金属製品には鉄釘28点、銅製饅頭金具１点、銅板３点などがある。饅頭金具は直径2.7cm、高さ1.2cmの笠形の頭部に0.5cm角、長さ4.5cmの脚がつく。銭貨には雨落溝埋土から出土した延喜通寶１枚がある。

4　まとめ

回廊東西長について第７次調査では西回廊が南北里道上にあると考えて19間以上にはならないとした。しかし、今回の成果によって西回廊は里道の西寄りにあることが判明し、回廊東西長は両隅の間を数えて21間（約64ｍ）であることが確定した。回廊南北長については今回の成果から14間以上であることが確認された。その北、第２次調査の石垣までの間は約18ｍで、石垣の法面等を考慮すると回廊北側柱までは５間以内であり、回廊南北長は18～19間（55～58ｍ）と推定される。

回廊内側雨落溝である石組南北溝が、調査区の南端まで直線で延びることが確認された事によって、西回廊の南端から９間目以北に大型の構築物としての門は存在しえないことが判明した。中門は仏堂正面にはなく北回廊に設けられたと考えられる。北回廊想定地の西半部にあたる第２次調査地では今回の検出面よりも約１ｍ下で、東西方向の石垣などを検出しており、石垣は一段高く造成された中枢伽藍の基底部にあたるとみられる。石垣は回廊東西幅の中央にあたる部分で途切れて、幅12ｍ余の斜道となっており、中門はこの斜道の正面上段に設けられたと考えられる。斜道の北約18ｍの東西中軸線をはさんだ位置に幢竿支柱の基礎とみられる１対の掘立柱遺構が検出されていることも傍証の一つとなろう。そうした場合、奈良時代の坂田寺は北入りで中門をくぐった正面に仏堂がない変則的な伽藍配置となる。回廊内に他の堂宇が存在するかどうかの課題はなお複雑になったといえよう。

（西口壽生　瓦；佐川）